

美術評

名古屋ポストン美術館は一九九九年にオープンしたが、今年の秋を最後に閉館となる。今回はその締めくくりの展覧会の前半で、有名な画家の作品を中心とする。ポストン美術館本館の収蔵品の幅広さと質の高さを示すように、古代エジプトの彫刻から、喜多川歌麿や英一蝶など日本の美術、徽宗皇帝ら中国の美術、モネやセザンヌなどの近代フランスとアメリカの美術、そして現代美術の作品が披露される。

同時に、開国まもない日本の美術や生まれたばかりの印象派などの真価をいちはやく見抜いて、私財を投じてコレクションを築き、ポストン美

明治150年展 明治の日本画と工芸

古今の名品 幅広く紹介

術館に寄贈した人たちの功績も紹介されている。名品展という性格上ひとつのまとまりを見せる企画ではないが、ポストン美術館がどのような人々の貢献でつくられてきたかということが、本展に通底するテーマである。



フィンセント・ファン・ゴッホ『郵便配達人ジョゼフ・ルーラン』1888年 (Gift of Robert Treat Paine 2nd, 35.1982) Photograph © Museum of Fine Arts, Boston

会場にはすばらしい作品が並ぶ。そのひとつ、ゴッホの「郵便配達人ジョゼフ・ルーラン」(一八八八年)は、この画家がアルルにいたときに描いたもので、縦八十センチほどのキャンバス全体に、男性の姿が表情豊かにしつかりとと

ポストン美術館の至宝展

らえられている。紺色の制服のしわで金ボタンが部分的に隠れている描写や、腕の部分を描き直した跡からは、努力家であったゴッホが身体の量感や立体感を表そうと工夫を重ねたことがしのばれる。

名古屋ポストン美術館の運営には開館当初から財政的な苦労があったが、二十年足らずの活動期間に約六十回の企画展が開かれ、教科書にも載っているような名作が名古屋にもたらされた。すぐれた美術作品と気軽に対面できる貴重な場を、次の世代に引き継げなかったことが悔やまれる。

(浅野和生―愛知教育大教授)